

アウシュビッツ博物館公式ガイド 中谷剛さんと立花先生の対談記録

中谷 剛（なかに つよし）さん

1966年兵庫県神戸市生まれ。1991年よりポーランドに居住し、1997年ポーランド国立アウシュヴィッツ・ミュージアムの公式通訳の資格を取得。

現在、同ミュージアム唯一の外国人公式ガイド（嘱託）。通訳・翻訳家。

アウシュビッツがあるオフィチェンシム市に在住。

（「アウシュビッツ博物館案内」の著者紹介より引用）

*本原稿は公開にあたり中谷さんにチェックいただきました。ありがとうございます。

◆アウシュビッツ博物館と歴史家 ー歴史を伝える責任の重み、その自覚ー

ー中谷さん（以下、敬称略 中谷）

アウシュビッツ博物館は本格的に展示が開始された1955年からかわっていないのです。展示されているのは、要するに「Visual」。説明文が極めて少ない。目に訴えられる内容です。そして、それがアウシュビッツ博物館の一番の特徴なのです。

私たちガイドが声をあげて、これはこうだったと説明するのもいいのでしょう。けれども、それをしなくても、ただ流して見せていくだけで見えてくる場所があります。それで変えなかったのですよ。



ー立花先生（以下、敬称略 立花）

さきほど収容体験者のスモーレンさんのお話を伺いました。そのときに、とても厚いアウ

シュビッツの年表をみせてもらいました。すごいですね。あの本はどこでも買えるのですか？値段は高いのでしょうか。

—中谷

いえ、そんなことはありません。あれは社会主義時代に歴史研究家がつくったものです。そんな高くはありません。ただ、彼女の思い込みがけっこうあったらしく、新しい歴史家が最近それを指摘しています。新しい年表がでるかはわかりませんが、修正すべきところもすごく細かくあるのです。

—立花

けれども、すごく調べられたものですよ。

—中谷

ここには「歴史家」がいるのです。つまり、博物館なので当然ですが、学術研究員がいます。私が思うに、彼らは極めて「しっかり」しています。それも人間的に「しっかり」した人が多いのです。「歴史家」といっても、歴史だけじゃなくて、その歴史をどうやって利用していくべきかをきちんと考えられるような人。なんと表現したらいいか、人のあたたかさを感じるような人が多いとでもいえいいのでしょうか。

◆アウシュビッツの訪問者／超えてはならないバロメーターを備え付ける歴史教育

—立花

日本の政治家のなかで、誰かハイランクの人が来たことはありますか？

—中谷

民主党の方は、野党時代にいらしていましたね¹。

あとは、石原都知事（当時）がいらっしゃいましたよ。

—立花

そりゃ、逆にありうる（笑）

—中谷

ちょっとお忍び的に。職員を周りにつれて、若い奴に見せてやるという感じでしたね。ベルリンでオリンピックを誘致していた関係で、こちらにいらしたときでした。

¹ この対談の2010年当時は、民主党政権下であった。

—学生（佐野）

見学者は学生が多いですか？

—中谷

いいえ。そういうわけではありません。けれどもこここのところ、うれしいことに、学生さんが増えているのですよ。この秋とかも結構多かったですね。

—立花

全体の訪問者の数としてはどうでしょうか。アウシュビッツを訪問する人は増えていますか。日本からくる人だけの話ではなくて。

—中谷

日本からいらした方の数は、減ったり増えたりで、そんなに変わらないです。私は最初、平和とか、展示とかいうものを見にやってくるのは、教師や先生のような方が中心ではないかと思っていました。それが案内をはじめてみると、そういうわけでもなかったのです。本当にさまざまです。企業の方や、立花先生のように作家の方、一般の方、本当にいろいろな方がいらっしゃる。それはある意味、新鮮な驚きです。

—立花

ドイツ人はどうでしょうか。

—中谷

全体的に非常に多い。最近ではイギリス人も多いので、見ただけではドイツ人か判断がつきにくくなりましたが、ドイツ人は外国人のなかでも1万人から3万と訪問者数が多いのですよ。彼らは自分の国のなかに強制収容所をもっていましたし、それでもここまでいらっしゃる。すごいことだと思います。

お気づきになったかもしれませんが、この博物館の中にはドイツ語の説明書きがありません。ドイツ人に対しては、「あなたたちここで勉強しなさい」という展示ではないのです。ここに来るドイツ人は、知っていた上で、もう一度それを確認にくるわけですよ。ドイツ人にはわざわざ説明する必要はないわけです。

ガラスケースの中にある資料はドイツ語ですが、彼らはベースとしてすでに学校で学んでいるわけです。博物館にやってきて、アウシュビッツでこんなことあったのかと、考えるドイツ人はまずいないと思います。

ドイツの場合は子どもたちがうんざりするくらい、もういいのではないかと思うくらい、徹底的に歴史を学びます。その悪影響も出るかもしれませんが、いずれにしても、いや

というぐらい、学ぶのですよね。

—立花

小学校ぐらいからですか。どれくらいの時間をかけて学ぶのでしょうか？

—中谷

中学からだと思います。ぼくが知っている限りでは、半年から1年ぐらい通じて行うようです²。もちろん経済不況あたりから原因をたどって³、全体的に、です。

ヨーロッパでは、毎年「戦争」、もしくはホロコーストに関する映画ができます。それも、その映画が賞とるのですよ。これはいかに彼らが、この出来事にショックを受けたかということではないかと思います。西欧文化を誇りに持っている彼らにとっては、ホロコーストというのは、ショックで、「傷」なのです。だからこの出来事は、これを超えてはいけないというバロメーターになっている。いいかえると、歴史教育によってひとつのハードルを備え付けているのだな、と僕はそう思いますね。

◆なぜドイツ人は執拗にユダヤ人を追い詰めたのか

—立花

あちこちで質問しているのですが、ユダヤ人絶滅にかけた、ドイツ人のあの「情熱」ってなんだったのでしょうか。



² ドイツは州によって教育制度が違うが、大概是中等段階Ⅰである第7学年（日本でいう中学1年）から3~4年をかけて古代から現代までの一通りの通史を学び、その後の大学に入るまでの中等段階Ⅱの3年間は細分化されたテーマごとに学ぶ。中等段階Ⅰの最終学年はワイマール時代から統一までをほぼ1年間かけて学ぶことになる。「現代史の重視がドイツの歴史教育の大きな特徴のひとつ」と川喜多も指摘している。（川喜多敦子「ドイツの歴史教育」2005: 13-16 白水社）

³ 第一次世界大戦で背負った巨額の賠償金、世界恐慌によってドイツでは不況が引き起こされ、その社会不満がナチスの支持に結び付いたといわれている。

—中谷

このあたりは、個人的な意見としてお聞きいただきたいのですが、ぼくは俗にいう「コンプレックスの裏返し」ではないかと思います。

つまり、第二次世界大戦の前に負けたこと、すなわち第一次世界大戦の敗戦と、多額の賠償金、それに加えて世界大恐慌の経済不況が引き金になって火花が散った。それで、ずっと積もり積もっていた、いうなれば、偏見とか、差別意識とか、そういったものに火がついていったわけです。

けれども、そのエネルギーというのがものすごかった。要するに、階級社会になっていくわけです。経済不況に追い込まれた人たちが、勝ち組か負け組かのいずれかになるしかない状況になっていく、そこでの失業者たちのフラストレーションというものが。

要は、国家として、国民として「否定」されたわけですよ。もともと勤勉で技術レベルも高い「ドイツ」の人たちにとって、やっぱり「傷」をつけられた出来事だったのだと思いますよ。

その「裏返し」として、あれぐらいまでして心の平和を求めるといえるか、排他的にしていく流れになった。それは、技術や知的レベルが高い分、また強烈だったのだ、と私は思います。

—学生（渡部）

単にヒトラーの問題だけではなく、国民全体としてそういう雰囲気になっていったということですか。

—中谷

もしかしたらヒトラーがのっかれるような、社会的な価値観が社会のなかにつくられていったのかもしれない。

階級社会がつくられていく過程で、つまり、ヒトラーがのっかり、排他的になれるような「階級社会」が土台としてできたからこそ、あの政治家がよばれていったのだと思いますよ。ヒトラーが先にぐっとひっぱったのではなく、社会が彼を呼び込んだのだ、私はね、個人的には思います。

—立花

（ナチズムは）経済的な合理主義が根底にあるといわれることがあります……けれども、ヨーロッパ中のユダヤ人をあそこに集めて、ただひたすら殺すだけの設備をこれだけつくって実行するわけでしょ。その実行のすべての過程において経済的合理主義がほとんどないですよ。ユダヤ人を集めて、とったものをまた集めて、それを消費するということが目的であるといわれても、現実をみるとなにも意味がなかったことだとわかる。眼鏡なんかいくつ集めたって、髪の毛をいくら集めたってなんの意味もない。

一中谷

ナチスはユダヤ人に対して、(財産を) 自分の土地においていけという方針でした。例えば不動産とか銀行預金も、一定額以上あると没収した。要するに、使えそうなものは自分のところにおいていけ、と命令し、残りを 30kg から 50kg ぐらいに制限してトランクにつめさせて、東の土地に住むのだといって持ってこさせたわけです。

だからアウシュビッツに残っているのはゴミ扱いされて使えなかった一部と、最後まで隠してもってきた、残っていた宝物、宝石類などなわけです。ときには飲み込んでもってきます。そうしたらそれを灰の中から、つまり死体から、探させるわけですよ。

だから、その彼らの経済資産や不動産が、みんなユダヤ人とともに入ってきたとすれば、これは相当の経済的価値観があったと思う。

一立花

でもさまざまな統計(記録)があるでしょ。

一中谷

それは、アウシュビッツにやってきただけの量ですから。

ああいったものが、ユダヤ人がおいていかなければいけなかったものが、たくさん自分たちの土地にあったわけです。そして、そのお金が今度はスイスの銀行との取引に使われていったわけです。

ただ、おっしゃるとおり、あの徹底さは、経済的な観点だけで行われたとは思えない。

やはりさっきお話しした、自分たちの「コンプレックス」と名付けていいのかわかりませんが……

一立花

あれは「コンプレックス」というようなもので説明できない、もっと宗教的なもののような感じがしますよね。実際は宗教的世界ではなく、反宗教的世界なのだけれども。……本当にわからないですね。

一中谷

人間の支えを求めている姿ですかね、社会の安定とか、支え、生きる支え……

僕なら、こういつてしまいますけど。

社会の平和と安定のために、あれだけのことが起きました。

人間、そんな風にできるのだ。

自分という人間も、と。

◆みなくていい「システム」の設立と「傍観者」

－立花

2日前にベルリンのテレビでさかんにやっていた番組がありました。ヒトラー時代に一般市民がいかにかヒトラーに熱狂的に支持していたか、自分はそのときにどこにいて何をしていたかという回想と時代風景を重ねて放映していましたね。



－中谷

それはとっても大事なことでして。その中でも、やっぱり一番大きいのは、「関わりたくない」ということだったかもしれない。

(世界中にいた)「傍観者」が一番大きな役割を果たしたのではないかという考え方が一般的です。

－立花

それと、僕たちがいまみているアウシュビッツはああいう形で、我々は中で起きていたことも相当知っていますよね。

でも、同時代的にはどの程度わかっていたのだろうか。ドイツ人はほとんどわからなかった「世界」でもあったでしょう。

－中谷

システムとして、見なくてもいい「システム」をつくったわけです。

ガス室をつくったのも、ユダヤ人たちをガスで苦しめるためにつくったのではなくて、危険なユダヤ人たちを効率よく排除して、なおかつドイツ兵の精神的な負担を軽くするためです。

ドイツ人はガスを放り込んだあと蓋をしめるだけ。そこからあとはみんなユダヤ人の工夫

(特別任務隊)に運ばせて、焼かせる。

あそこでは、多くの人がガスで苦しんで死んでいるわけですがけれども、つくった側は苦しめさせるのが目的ではなかったのです。ドイツを守るために危険なユダヤ分子をいち早く排除して、なおかつドイツ兵の精神的負担を軽くしようという目的であった。

だから、ドイツは国内でもあんなものを考えて、実行に移したのですよ。

(今となってはドイツの弁解にしか聞こえませんが、そのような風潮があったと思います。

4) その(風潮)の連続性で、一般的な国民だけでなく、SS(親衛隊)たちも直接的な様相はみなくてもいいようなシステムをつくっていくわけです。

見なければ、わからない。

—立花

日本だってそうでしょ。戦争世代の中国や朝鮮であったこと、いまの若い人ほ・と・ん・ど何もしらないもの！ちょっと話したら、え、そんなことがあったのですか、ってそんな感じになってしまう。

日本人はずっと全部そうなのですよ。あの時代のドイツ人とおんなじ。

(先生、私たちを指さしながら)いまの若い人たち知らないでしょ！

◆見ることと知ることの違い

—学生(佐野)

ただ、ドイツは、とくにイギリスからのラジオで情報が入っていたのではないのでしょうか。その裏づけとして、外国語放送が禁止されていた時期もあります。外国語放送を聴いていたか否かが尋問の内容にも入っていました。尋問を恐れて口にはだせなかったけれど、一般の市民も、ユダヤ人が東にいったら殺されると実は知っていたのではないのでしょうか。

—立花

ある程度は知っていたでしょうね

—中谷

ただ、その「知っていた」というのが違う。今日皆さんも経験したと思いますけれど。アウシュビッツは「情報」としてそこらへんにたくさんあるわけですよ。けれども、今日みなさんが来て、実際に髪の毛をみたり、メガネの山をみたあと「知った」のと、アウシュビッツを、ひとつの、なんというか「情報」として知るのでは雲泥の差があります。当時の連合軍も「情報」を聴いていたけれど、ここを解放しようとはできなかったのはそれが理由だといわれている、つまり想像できなかったといわれているのです。

⁴ 本原稿を公開するにあたり、中谷さんに確認し、わかりやすくするために括弧部分を補足いたしました。

「情報」だけではわからない。

実際に子供がのたうちまわって、あのガス室の中で赤ちゃんが死んでいる様子を見ていないと、絡まって死んでいる様子を、ごみを焼くようにどンドン焼いて、内臓に油かけて焼いているようなあの様子を見ていないと……

—立花

いや、しかしあそこまで、あからさまに中の様子が出てきたのはそんな昔ではないでしょ。ニュルンベルク裁判で、証拠品としてブルドーザーで死体を処理するあの風景が出ますよね。それをナチスの連中がみんな被告席からみているじゃないですか。みんな仰天した顔を本当にしているわけです。彼らは「知らない」わけですよ。

—中谷

そういうことです。見て知っていない。

—立花

ここまでアウシュビッツの様子が出てきたのは、ぼくは、割と最近だと思うのですよ。とくにガス室の内部。本当にこんななりながら（先生：両手を絡めながら死体が絡み合っている様子を示す）死んでいったという事実が出たのは、ものすごくリアルなゾンダーコマンド（＝特殊任務隊）の回想録がでてからではないかと。第1収容所にガス室の模型があるじゃないですか。今日、模型をみて、人型が絡まっているのとあの文章がそっくり重なって、ああ、あの通りのことだったのだとよくわかりましたね。

回想録にも、自分たち（特殊任務隊）があれを書けたのはつい最近のことだとありますよね。内部のことが出てきたのは割と最近ではないですか。

—中谷

そうですね、それが「社会に受け入れられた」というのが最近ということですよ。

（特殊任務隊の人たちは、回想を）話そうと思えば話せるのですが、あまりにも次元が違って聞き入れられないのです。例えば私がゾンダーコマンドの人と話をすると、最初はだいたい2時間か3時間人生論を話すのですよ。いきなり自分がやらされたことを話してもわかってもらえないだろうと。まず自分のことを話して、自分はこういった人間か、君はこういった人間かを2、3時間話してから、一番最後に話す、そういう感じですね。

—立花

被爆者の話をすると……長崎で生まれて、爆心地で生まれていますから、ぼくは長崎にすごい関心がありまして、この前も爆心地で死んだ人の話を聞きにいったのですが……被爆者の人たちも本当に自分たちの経験したことをリアルに語りだしたのは相当時間がたって

からですよ。あまりにも筆舌に尽くしがたい経験をしてしまうと、しゃべっても絶対通じるはずがないと思って、しゃべらなくなっちゃうのですよね。

ゾンダーコマンドの訳がでたのは割と最近ですから。あれを書いている人がしゃべらなかったのは、しゃべってもわかってもらえない、誰にも通じないというそういう気持ちでずーときたからだ。それは被爆者の心境ともものすごく似ている。

—中谷

つらかったのは、もうそういうことは忘れて、将来に向けて頑張りなさいといわれたことだと。それが一番ショックだったと。

—立花

いま、ゾンダーコマンドの生き残りってどれくらいいるのですか。

—中谷

これがですね、生還した数がわからないのです。

解放されたことを明らかにしない人がたくさんいたのです。なぜかという、冷戦がはじまりましたでしょ、欧州ではここに収容されていた人たちを英雄扱いしなかったのです。その名誉が回復したのはやっと冷戦が終わってからです。だから生還された人がいてもよくわからない。

それからユダヤ人迫害は戦後終わりませんでした。さらにイスラエルが建国されて、東ヨーロッパはソビエト側、つまり反アメリカ、反イスラエル。となると、状況は大変複雑でした。

だから、生還された方が本当に何人いるのか、いまどれくらい生きているのかわからない。

収容されていたことをいわないほうがいいというそんな風潮までありましたから。

当然社会のリーダーが収容されていたことがありますから、政治犯として、社会主義体制では目を付けられる可能性もあるから、すごく複雑で。

45年に戦争がおわっても、彼らに平和が訪れたわけではないのです。

だから、冷戦がおわって、もしかしたら、やっと胸を張って収容されていたことをいえる状態ができたのかもしれない。

—立花

同じ人であっても、別の機会に、ここを話すのは今度が初めてだという形で、本当にびっくりするようなことを話すことがありますよね。本当に深い深いところまで。そういう状況がずっとあったのか、えー！と思うくらい。

今日スモーレンさんのお話聞いたのです。いまみたいな話を延々とお話するのはですよ。

—中谷

あの人、今年 90 歳ですよ。

—一同

(どよめき) えー！

—中谷

あの方は、本当に話したくて仕方がないのですよ。聞いてくれる人がいれば。

◆混沌の時代の歴史教育の意味—現代社会と次世代につながる教訓—

—中谷

私はいつもご案内するときに断りごとをします。

「(アウシュビッツは) 自由に入れるのです、そっちの方法(自由に回る)もあるし、私が案内してもいいです」と⁵。

なぜかという、案内に追い回されて聞いているのと、個人的に 1 人 2 人で歩くのでは、やっぱり感じが違ってくるのです。



みなさんは、どういうタイプの人かわかりませんが、「データ」ばかり、アウシュビッツで何が起きたかという「情報」ばかりを入れるだけでなく、やっぱり想像力と覚えることが必要なのです。当時、あれだけ優秀な人がいて、ブレーキがかけられなかったわけですから。

博物館を回って、何か寒気を感じたとか、そういった直観的な感じ方っていうのが、やっ

⁵ ただし、現在はアウシュビッツ博物館の入場、およびガイドツアーはオンラインでの事前申請が必要となる。2010 年の訪問時に比べ、荷物の持ち込み制限などテロ対策による規制も加わっているため、訪問前によく確認願いたい。詳細はアウシュビッツ博物館訪問申し込みページを参照（リンク先は英語ページ）。<http://visit.auschwitz.org/?lang=en>（2015/01/27）

ぱりどっかに必要なのですよね。

自由な時間で、個人的に歩いてみるとか、ひとりやふたりで歩いてみるとか、そういう経験はたぶん大事だと思いますしね。

—立花

だったら明日午前中はビルケナウを回って、そのあとは各自自分の行きたいところに散るということ

—中谷

この宿舎から第1収容所はすぐですよ。前の大通りを、まっすぐ行って右に曲がったらすぐ第1収容所がみえます。

ここは基督教の施設ですけど、一番偉い人（神父さん）はドイツ人なのです。（ドイツ人の）そういう地道な活動が、国際青少年センターとかにもあらわれている。ユダヤ人はまだここになかなか泊まることはできませんけれど。ポーランド人だったら普通に使えます。ドイツは地道にこういう活動をやっていますよ。

—立花

ドイツ人はどんな感じですか。ここにきて。

—中谷

もちろんきわめて、案内の仕方も、まじめで……

英語ができるドイツ人もいますので、話したこともときどきあります。

彼らはすでにドイツで歴史について教育を受けています。どういう感じ（の教育）かという

うと、全体の流れとして、

「君たちに戦争責任はない、その時代には生きていないわけだから。将来似たようなことを繰り返さない責任を持っている」

こういった教育の仕方ですよ。「なぜ、歴史を勉強しなくてはいいかないか」という疑問についてですが。

歴史を知らなくても、悪いことに手を染める人はそんなにいないわけですよ。

しかし、なにかすごく急進的な人が出てきたときに、「傍観者」になる可能性があるわけです。それに対して「反応できる」自分をつくるために、その材料として歴史を記憶しておこう、それが動き始めた歯車にブレーキをかける方法、そういった考え方なのです。

それだと過去の歴史も素直にポジティブに考えていけるというような流れがあるのですよね。実際にすごく真剣に見ているし。

もうひとつ感心するのが、（周囲が）ドイツ語で見学をしている人に対して、嫌な目で見たり、当然ありませんけれど罵声を浴びせたりなんて、そんな動きがまったくないことです

よ。

ここまでよくドイツ人が来ているな、という感じをみんな持っているし。ユダヤ人が並んで見学している近くで、ドイツ人が説明を聞いていますからね。

かえってユダヤ人たちが、イスラエルの国旗を翻しながら見学しているのをみると、「壊された歴史」の支えとして国旗が見えてきたり、デモンストレーション的になってみたりする様子が伺える。

ドイツ人よりも「傷」を負わされたユダヤ人のほうが、負わされたほうが激しいですよ。支配階層にいた人たちより、支配された側にいた人の方が「傷」を残されて、この歴史とは無縁じゃないと思うし。

—立花

彼ら同じことをパレスチナに対して、やっているものね。

—中谷

それはやっぱり負わされた「傷」、羞恥心 そうやって扱われたのが逆にコンプレックスにでているのかもしれないね。

—立花

ドイツで東西の教育の内容の違いとかマインドって感じますか？

—中谷

私は直接感じたことないのですが、間違えなくあると思います。なぜかというと東ドイツはソビエト側の国で、「第二次世界大戦に勝った」という事実を強調する「歪んだ」教育だったでしょ。ポーランドをみただけでもよくわかるのです。冷戦が終わる前のポーランドのホロコーストに対する教育なんて、本当に私たちの教科書と変わらないくらい一行でしたから。冷戦がおわって、はじめてみんなで席について、ホロコーストをどう伝えていくか、ホロコーストはこういったことだ、とユダヤ人たちと話をしたのです。それで初めて、「アウシュビッツで犠牲になった 90%はユダヤ人」ということが明記されたのです。それが冷戦後ですよ。

それまでは、事実は曲げてないけれども、二十数か国から連行されてきて殺されたとか記載されていた。当時の政治状況の影響もありましたが、そのようなことがガツンと明記されたのは、そんなに昔じゃない。それまでに教育を受けた人は、いまの若い人たちと違う教育を受けたわけですよ。

それを考えると東ドイツも当然のことながら西ドイツの教育とは大分差があったはず。ドイツとヒトラーだけに責任を押し付けてホロコーストを理解するという、とりあえずの教育の仕方もあったとすれば、それももう時代遅れになっているわけですから。

だからやっぱり社会状況に応じて教育は変わってきているのだとは思いますが。

—立花

今日、ポーランドの81年世代という話を聞きましたが、そういうようなものを何か感じますか。戒厳令のときに生まれた子供たちのことで、ポーランド人の認識が81年世代の以前と以後で全然違うという感じになったという話でした。

おそらくベルリンの壁崩壊後の動きも、あの81年世代の動きがあったからというところもあるのではないかな、と

—中谷

それはやっぱり教育が変わったところですよ。たぶん。それ以降のエリートの方は、このアウシュビッツの話ひとつとっても、受け取り方が違うのですよ。

冷戦前は、ポーランド人の間であっても、ユダヤ人を助けたなどという、近所からも、国家からも目をつけられるような雰囲気があった。ユダヤ人を助けたことは、いまみたいに自慢できなかった、つまり、助けた人も大きく口に出せない時代がありました。ポーランドだけじゃないのですよ、スロヴァキアなんかもっとひどかったし。ナチスに金を払ってまでユダヤ人を連れて行ってくれと戦時中にいていた国ですから。

歴史を紐解けば、もうそこら中に（そんな話が）出てくる、それをみんな背負っているわけです。

—立花

日本もしばらく前からポスト冷戦時代になり、大学にそのなかで教育を受けた連中が入ってきている。考えてみれば、おんなじことが起きているわけで、ポスト冷戦時代になったという変化は、いま出ているはずですよ。

—中谷

混沌の時代ですかね

—立花

（参加者の学生たちを示しながら）ここらへんの若い人たちが……生きる時代です。

—中谷

おとといたったかな。学生を案内したのですけれど、本当にぱっとみたらファッションからなにか東京を歩いている人なのです。それがですよ、そういう話題を口にしながらも、話をちゃんと聞いているのですよね。

この前驚いたのは、音楽大学の学生を案内したとき、彼女たちが夜8時、9時ごろになると、

お酒を手にしながら政治の話をするのですよ。今の社会はそういうのがあるみたいなのです。

—立花

それはいまの日本の政治がめちゃくちゃになっているから。あっという間に何が起こるか分からないから。

—中谷

以前より全然、ここに来た学生の食いつきみたいなのがいいのですよ。
それはここ 2、3 年感じます。



2010年9月3日 オフィチエンシムにて
(録音記録から佐野編集)